



Title	地域資源としての文化財とツーリズム
Author(s)	吉原, 秀喜
Citation	先住民文化遺産とツーリズム：北海道の可能性(International Symposium: Indigenous Heritage and Tourism – Potential in Hokkaido). 2012年10月13日-14日. 北海道大学学術交流会館小講堂, 札幌市.
Issue Date	2012-10-14
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/51246
Type	conference presentation
Note	セッション1: パブリック考古学の可能性
File Information	session1report3.pdf



[Instructions for use](#)

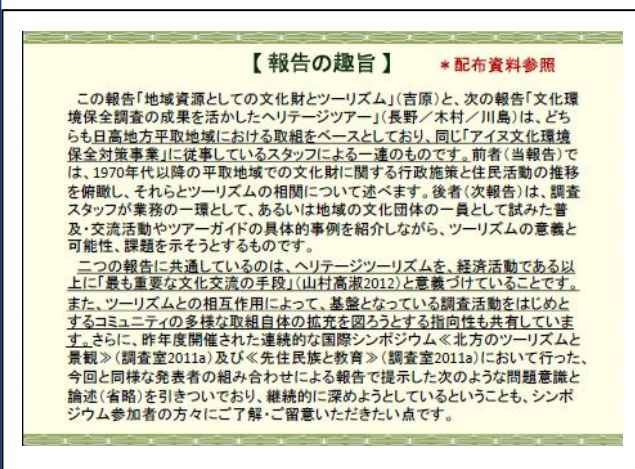
International symposium 2012 Indigenous Cultural Heritage and Tourism

国際シンポジウム
先住民文化遺産とツーリズム
-北海道の可能性-

『地域資源としての文化財とツーリズム』

吉原 秀喜

(平取町役場アイヌ文化環境調査保全係)



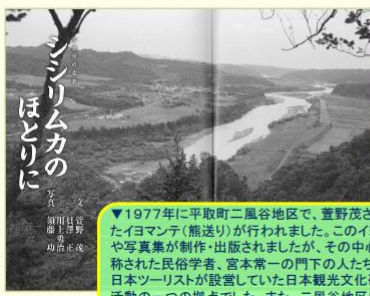
●2 文化財を地域資源として活かす試みとツーリズム



■ アイヌ関係
▼各時期ごとに、象徴的だったり、画期的だったりするできごとを<例>にあげています。時間の関係上、それぞれの期に一つずつ取り上げ、その意義やツーリズムとの関わりについて述べるようにします。

- ▼1970年代 民族の歴史・文化に対する再認識
<例> 二風谷アイヌ文化資料館の開館1972/二風谷イヨマンテ1977
- ▼1980年代 「伝統を守り、未来に受け継ぐ」
<例> アイヌ古式舞踊の国重要無形民俗文化財指定1984
ユオイチャシ・ポロモイチャシ・二風谷遺跡発掘調査1983～(報告書)1986
- ▼1990年代 「アイヌ伝統文化の今日的継承」
<例> 平取町立二風谷アイヌ文化博物館の開館1992/二風谷ダム裁判判決1997/アイヌ文化振興法制定・施行1997/沙流川歴史館開館1998
- ▼2000年代 「アイヌの人たちをはじめとする地域住民の主体的参画と専門家との協働」
<例> アイヌ文化環境保全調査2003/イオル整備事業の着手2008
- ▼2010年代 「アイヌ文化継承・振興の展開と深化」
<例> 平取町アイヌ文化振興基本計画の策定2010
町内国有林に関する「21世紀・アイヌ文化伝承の森」プロジェクト始動2012
※現代のアイヌ民族・文化をめぐる動きの各時期に、先駆的な取組事例を提示してきた。

▼1970年代 民族の歴史・文化に対する再認識
<例> 二風谷イヨマンテ1977



▼1977年に平取町二風谷地区で、萱野茂さんの指導のもと、古式にのっとったイヨマンテ(熊送り)が行われました。このイヨマンテをもとに秀逸な記録映画や写真集が制作・出版されましたが、その中心となったのは、「旅する巨人」と称された民俗学者、宮本常一の門下の人たちでした。当時、旅行会社の近畿日本ツーリストが設置していた日本観光文化研究所は、民俗学的な調査・研究活動の一つの拠点でした。また、二風谷地区におけるこうした取組の背景には、1960年代から70年代にかけての観光業の隆盛がありました。

▼1980年代 「伝統を守り、未来に受け継ぐ」
<例> アイヌ古式舞踊の国重要無形民俗文化財指定1984



▼文化庁により「北海道アイヌ古式舞踊」が重要無形民俗文化財に指定されたことはアイヌ民族・文化をめぐる状況に大きな変化をもたらしました。“やがて失われるから貴重”といったパラダイムが転換していく契機となり、若い世代へと継承されるものとなりました。保存会などでは、各地に向かい、集ったりする公演ツアーが活動の一つの柱となっています。

▼スタートして間もない平取町立二風谷アイヌ文化博物館が力を注いだことの一つは、工芸の振興でした。作品の制作それ自体を再活性化することと、工芸技術を活かした体験学習の開発・普及は並行して進みました。「文化遺産とツーリズムの相互作用」の、良い事例と言えるのではないのでしょうか。



▼1990年代 「アイヌ伝統文化の今日的継承」
<例> 平取町立二風谷アイヌ文化博物館の開館1992

▼2000年代 「アイヌの人たちをはじめとする地域住民の主体的参画と専門家との協働」<例> イオル整備事業の着手2008
平取地域 『イオル再生』



▼伝統的生活空間(イオル)の整備事業は、いま白老町と平取町で進められており、次には札幌市と新ひだか町で着手されようとしています。平取の場合、森林・水辺・集落の3つの空間整備が軸となり、文化継承・普及のための活動も多様に組み合わされています。再現されたコタンでは、「ユカラ」と語りついでい「週末ごと」に開かれています。一方、観光客や行政関係の視察などの来訪者も増えてきています。

●3 重要な地域資源としての遺跡・埋蔵文化財



先住民考古学が論じられる過程の中で明らかになってきたことは、考古学が調査研究を通して明らかにし、構築する歴史のイメージが現在を生きる先住民に直接影響を与えるということである。考古学の研究は、これまで意識されていた以上にそこに生活する先住民の歴史意識と深く結びつき、現在そして将来の権利回復活動に大きな影響を及ぼすのである。
* 加藤博文2012より

ICOMOS(国際記念物遺跡会議)が1999年に「International Cultural Tourism Charter(国際文化観光憲章)」で定義しているように、ツーリズムとは経済活動であるとともに「最も重要な文化交流の手段(the foremost vehicles for cultural exchange)」である。つまりツーリズムとは、先人から受け継ぎ、次世代へ引き継ぐべき文化遺産(cultural heritage)の価値・重要性を、旅行者だけでなく、地域社会内の人々へ、「現場での実体験」、あるいは「知識」、そして「感性面での親しみ・楽しみ」として、「現場での実体験」、あるいは「知識」、そして「感性面での親しみ・楽しみ」として、アクセス可能にするための手段なのである。
* 山村高淑2012より

◇加藤博文2012『先住民文化遺産と地域に根ざした考古学』『先住民文化遺産とツーリズム:アイヌ民族における文化遺産活用の理論と実践』12-28頁北海道大学アイヌ・先住民研究センター
◇山村高淑2012『ヘリテージツーリズムと先住民観光』『先住民文化遺産とツーリズム:アイヌ民族における文化遺産活用の理論と実践』35-44頁北海道大学アイヌ・先住民研究センター

遺跡の宝庫 びらとり。

〜この川は深い育ちからずっと人と文化を育んできた〜



遺跡の宝庫 びらとり。

〜この川は深い育ちからずっと人と文化を育んできた〜



ユオイチャシ跡
ボロモイチャシ跡
二風谷遺跡

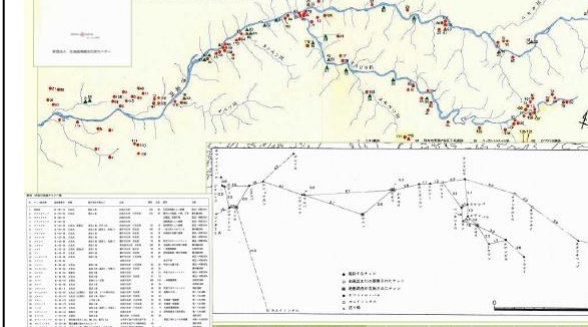
〜この川は深い育ちからずっと人と文化を育んできた〜



【1】直接・間接に地元コミュニティの関心を高め、歴史認識や文化理解、そしてアイデンティティに変化

宝庫 びらとり。

〜この川は深い育ちからずっと人と文化を育んできた〜



●平取町のイオル構想提言書『IWOR2002』より

III-9. 文化の保存・伝承とIWORネットワークの関わり(例(B))

このページで検討しているのは、アイヌ文化の保存・伝承と、アイヌ文化の振興・発展を目的とした「アイヌ文化の保存・伝承とアイヌ文化の振興・発展」の取り組みです。アイヌ文化の保存・伝承とアイヌ文化の振興・発展は、アイヌ文化の保存・伝承とアイヌ文化の振興・発展の両面から進められています。

アイヌ文化振興のために沙流川流域全体の適地をネットワーク、潜在力を引き出し、活用するというイオル構想にヒントと素材

【2】文化・歴史を活かした新しいプロジェクトの導因となったり、根拠づけとなったりする

重要文化的景観選定区域の位置・範囲・特徴

法定区域面積合計 = 4,381ha (町全体74,316ha)

- B=アイヌの伝統を伝える、山野と集落の景観 (1302.3ha)
- C=峡谷との対照が際立つ開拓地の景観 (10ha)
- E・F=自然とアイヌの伝統、開拓の営みが織り成す多文化な河川景観 (220ha/608.5ha)
- D=牧野・牧野林とスズラン群生地の景観 (310ha)
- A=北海道日高地方における里山の景観 (1928ha)

Archaeological site plan showing various pits and structures with detailed labels and measurements.

【3】新しい展示、場合によっては新しいミュージアムを生み出す源となり、人びとが集う場となる

Collage of photos showing museum exhibits, including artifacts, informational panels, and people interacting with the displays.

●4 「アイヌ伝統文化の今日的継承」再考



20世紀終盤から21世紀にかけての時期を、後世の歴史家はアイヌ民族にとっての「文芸復興＝ルネサンス(アイヌ語で表現されるべきだろう)」の時代であったと評価するようになるだろう。渦中にある人たちは、あるいは傍観的な立場にある人たちも、やや大膽な表現、過大評価と想うかもしれない。しかし、1997年の「アイヌ文化振興法」制定・施行に象徴されるように、ここ数十年の間に、アイヌの人たちの民族としての復権運動は、かつてない広がり、深まりをもって進んだ。単純化を恐れずに言うならば、否定から肯定への、抑制から発露への、圧迫から促進への、差別から尊重への、あきらめから希望への、同時代に生きる人々の価値観のドラステックな転換ともないながらこの歴史的過程は進みつつある。

町立博物館が掲げる運営の基本理念「アイヌ伝統文化の今日的継承」は、過去にたいする再認識の作業を進めながら、現在の変化しつつある諸条件をふまえ、未来への受け継ぎ方・活かし方を探るための統合的なプロジェクト、共同事業の目標でもある。その成否は、どれだけ関わる人々の輪を大きくし、意志を強く深いものにできるかに依っている。すでにその兆しは始まっているが、将来は都会におけるアイヌの活動が相対的には重みを増すであろう。しかし、アイヌの伝統は、非農業的・非都市的な狩猟・漁労・採取の生活に主な根源をもっている。人々がその記憶を忘れずに受け継いでいく限り、二風谷のような土着性・歴史性を擁する地域に在る博物館(群)の存在とその役割が、ますます重要度を高めるものと考えられるし、それに応えるための努力が続けられるであろう。

*吉原(米田)秀壽 1999『平取町立二風谷アイヌ文化博物館の位置と役割』スミノエ博物館特別展図録『AINU—Spirit of a Northern People—』(日本語原文)

■アイヌ民族の文化表象において予測される変化のイメージ(概念図)

◆収縮と拡大の、両方の力が錯綜しながら作用し続けているアイヌ民族をめぐる今日的な社会状況、文化的な時空の中で、ミュージアムなどの施設やIWOR、あるいは文化景観・環境はどのような位置を占めるのか、どのような役割を果たしうるのか(果たさせるのか)?

*シンポジウム2011《北方のツーリズムと景観》におけるコメント
⇒ ⇒ ⇒ ⇒ ⇒

《The Dynamic Interaction between Tourism and Cultural Heritage》
* ICOMOS1999: INTERNATIONAL CULTURAL TOURISM CHARTERより
◆ ツーリズムと文化遺産とのあいだの相互作用を、どう制御するのか?

● 5 調査・保全対策におけるツーリズムへの対応

● As long as the Sarugawa River and the Ainu culture are

【ツーリズムの振興に関する基本的考え方】
～コミュニティベースなヘリテージツーリズムをめざして～

- ①文化面のインフラ・システム整備と人材育成を先行、あるいは連動させる。
- ②クラスター(房)の形成・成長を図る戦略手法で、漸次的に着実に拡充していく。
- ③自分たちの民族的・地域的流儀(スタイル)とペースを重視する。
- ④来訪者にコミュニティの取組自体、その構想とプロセスを理解・体感してもらう。
- ⑤「住民の主体的参画と行政・専門家との協働」をどの局面でも具現していく。

■ アイヌ関係文化財をめぐる取組の推移
——平取町の場合:1970年代より

- ▼1970年代 民族の歴史・文化に対する再認識
〈例〉ニ風谷アイヌ文化資料館の開館1972/ニ風谷イヨマンテ1977
- ▼1980年代 「伝統を守り、未来に受け継ぐ」
〈例〉アイヌ古式舞踊の国重要無形民俗文化財指定1984
ユオイチャシ・ポロモチヤシ・ニ風谷遺跡発掘調査1983～(報告書)1986
- ▼1990年代 「アイヌ伝統文化の今日的継承」
〈例〉平取町立ニ風谷アイヌ文化博物館の開館1992/ニ風谷ダム裁判判決1997/アイヌ文化振興法制定・施行1997/沙流川歴史館開館1998
- ▼2000年代 「アイヌの人たちをはじめとする地域住民の主体的参画と専門家との協働」
〈例〉アイヌ文化環境保全調査2003/イオル整備事業の着手2008
- ▼2010年代 「アイヌ文化継承・振興の展開と深化」
〈例〉平取町アイヌ文化振興基本計画の策定2010
町内国有林に関する「21世紀・アイヌ文化伝承の森」プロジェクト始動2012
※現代のアイヌ民族・文化をめぐる動きの各時期に、先駆的な取組事例を提示してきた。

■ 平取町アイヌ文化振興基本計画の位置づけ

▼2010年代「アイヌ文化継承・振興の展開と深化」
〈例〉平取町アイヌ文化振興基本計画の策定2010

第5次 平取町町志(平成18～27年)

アイヌ文化を取り巻く情勢を反映

平取町のアイヌ文化振興の発展を推進する基本的方向性を示す

平取町アイヌ文化振興基本計画

基本的方向性に基づき、アイヌ文化振興に關する各種事業の情報交換・共有を進め、効果的に事業を進める。

イオル再生事業
文化的景観事業(アイヌ文化館建) 平取ダム地域文化調査業務

教育委員会の既存の事業等
アイヌ協会平取支部の既存事業 資野茂アイヌ資料館の事業

平取町アイヌ文化振興基本計画により、各施策の連携を図り、効果的に進めます

※「アイヌ文化継承・振興の(さらなる)展開と深化」を2010年代の特徴であり、目標でもあると捉えました。平取町における「アイヌ文化振興基本計画」の策定は、それを象徴し、画期的な動きだと考えます。たんに希望・願望を描き、まとめたのではなく、現に取り組み、基礎も実績も蓄積されてきた事業・活動を踏まえて将来を展望した計画です。その中で、主要プロジェクトの一つに位置づいて、文化環境の調査・保全が進められています。

※「平取町アイヌ文化振興基本計画」(平取町:平成22年3月)より

■ 「協働」のスタイル = 調査室<プロジェクトSAR=サラ>を例に ①

※北海道平取町文化財調査推進協議会
協働事業第2年次報告書(2007)より
明治期の沙流川下流域におけるsar

Study of Ainu culture and Rivers
〈アイヌ文化と河川(および流域sar)に関する研究〉

▼「展開と深化」のための取組の例を紹介いたします。調査・保全に関してご指導をいただいている専門家の一人、辻井達一先生の植物生態学、湿地・沼地の研究を踏まえてお話をします。

■「協働」のスタイル = 調査室<プロジェクトSAR=サ>を例に ②

▼写真は、平取町紫雲古津における野外調査の様です。「川淵畑」の試行を軸に、並行して往時の自然環境や生活文化についての情報も蓄積してきた地域です。<sar>をキーワードに、流域の文化環境について、さらに多角的に明らかにしていきます。



※昨年度の調査報告書<3-4分冊>より

■「協働」のスタイル = 調査室<プロジェクトSAR=サ>を例に ③

▼同様の協働による現地調査は、額平川・宿主別川合流点付近でも試み始めています。すでに調査による情報の集積が厚いところなので、「顕揚型イウオロ」(総括報告書40頁)の文化環境に関する包括的な理解を深める取組とするよう期しています。



【アイヌ文化環境保全対策調査 総括報告書】2006 第1部「調査委員会意見とりまとめ」より

■「協働」のスタイル = 調査室<プロジェクトSAR=サ>を例に ④



▼今年度から来年度にかけて、額平川筋を中心に沙流川流域の協働フィールドワークを行う予定です。このようなプロジェクトSAR=「アイヌ文化と河川(および流域sar)に関する研究」によって、自然と文化、それらのつながりの包括的・立体的な把握に努めます。また、成果は各種の保全対策や、育苗整備をはじめ情報センター・博物館・歴史館の内外展示などに活用していきます。専門性の高い、多様な研修・学習の要望に対応できる文化基盤づくりを寄与していくことを期しての取組です。

■アイヌ文化環境保全対策事業の体制概観図 (平成24年度)

▼今春から加わっているヘリテージツーリズムWGメンバーとしても、実のある「協働」の調査・研究を続けていきたいと考えています。

▼今回のシンポジウムのサブテーマに、「北海道の可能性」とあります。沙流川流域におけるヘリテージツアーの取組が、良い先駆的事例となり、十勝川、釧路川、天塩川、そして石狩川など道内各地の主要な河川水系でも同様な活動が進むことにより、アイヌ民族・文化の基盤が拡充され、発信力が高まっていくように寄与していきたいと考えています。

●沙流川があり、アイヌ文化があるかぎり、

kanto orwa yakusakno arankep sinep ka isam

天から役割なしに降ろされたものは一つもない
⇒ いわんや人間をや？
⇒ 文化遺産と「人」を活かすツーリズムを。

謝辞
Acknowledgements

★ご参加の皆様へ
To all audience and participants
★北海道大学の関係者の方々に
The concerned parties of Hokkaido University
★地域でアイヌ文化継承・振興の取り組みを共にしている方々に
All who locally engage in efforts to succeed and promote the Ainu culture

※特に出典記載のない写真は報告者撮影。